

小島正憲

2010年11月、「国際スローシティ連盟」から、江蘇省南京市の南方にある高淳県柘溪鎮が、中国初の「国際スローシティ」に認定された。柘溪鎮の人口は2万人ほどで、6つの村からなる生態観光エリア(面積49平方キロ)で構成されている。この鎮の2009年度の1人当たり年間収入は9900元。

もともと「スローシティ」という運動は、1988年、イタリアのローマで発表されたファーストフードチェーン店の開店計画に、市民が反発して起こした、「スローフード」運動を拡張したものとされ、ネット上には下記のような解説が載せられている。



「スローシティ」は、イタリアの小都市、オルヴィエト市、キアンティ市、プラ市、ボスティアノ市など、スローフードに力を入れる街が、“質”“多様性”“感性”“楽しみ”といったスローフードの理念を街づくりにまで広げようと1999年に結成した小都市が発信する率先運動である。グローバリゼーションがもたらす標準化、効率化によって失われている街の個性や固有の文化、生活のリズムを守る、または再び呼び起こす、という考えがこの運動の根本にある。参加できるのは、人口5万人以下の街で、登録後に“スローシティ憲章”に則った街づくりを自らに義務付ける。スローシティの度合いを測るための評価基準も設置され、環境保全のほか、市民の意識や観光、景観など多岐にわたる。現在イタリアをはじめ、スイス、クロアチア、ドイツなどから約100の自治体が会に加盟しており、他のヨーロッパの国々、アメリカ合衆国、日本などからも参加の問い合わせがあるという。

「スロー」とは、ここでは、「注意深い」「心地よい」「豊か」という言葉に訳すのが、適切だ。グローバリゼーションのもとで効率化され、スタンダード化されている私たちの生活や身の回りの環境を注意深く観察し、見直し、そして地域の文化や伝統的なライフスタイルのなかに隠れている「心地よさ」「豊かさ」をみんなで探したそう。

(EIC ネット : 「スローシティ」から引用)

1. 中国版スローシティ

中国初のスローシティに認定された高淳県柘溪鎮は、上海から直行バスで約4時間、南京から1時間ほどの地点にある。柘溪鎮でバスから降りて、タクシーに乗って10分ほど走ると、道路沿いに「国際慢城柘溪鎮」という大きな看板がある。その看板にしたがって脇道に入るとすぐに、そこにはのどかな田園風景が広がっている。道路には車がほとんど走っておらず、田畑やぶどう園、梨園、竹林、池などの風景をゆったりとした気分で満喫できる。20分ほどで、慢城柘溪鎮の中心にあるホテルに着く。そのホテルは新築の3階建てである。この地区の景観を乱さないように配慮された建築であるという。ただし5階ぐらいの高さに相当する望楼がある。登ってみると、四方ともに、遠方までなだらかな丘が続くのみで、工場らしきものはまったくなかった。

ホテルの支配人は、「スローシティに認定されるには、人口5万人以下で、工場がない、騒音がない、大きなスーパーや飲食店がない、環境汚染がない、都市緑化に尽力する、伝統手工芸を有す、地元の特産料理を有す、などの54項目をクリアしなければならぬ。柘溪鎮がスローシティに認定されるには、まだまだ不十分どころが多いが、当地には工場が1か所もないし、植物が豊富であり、都会の近くにしては自然の生態系が多く残っているし、文化遺産も持っているので、都会の人間がここにきて生活すれば緊張感もほぐれ、ゆっくり、ゆったりできる。それが、柘溪鎮が“スローシティ”に認定された理由だと思う」と、話してくれた。

ホテルにはまったくお客さんがいなかったのも、支配人に聞いてみると、「冬季にはお客さんは少ない。菜の花の咲く季節には、たくさんのお客さんで賑わいます。お客さんたちは自転車に乗り、終日、のんびりとこの近辺で過ごされます」と、話してくれた。そこで私も自転車を借りて、ホテル周辺を回ってみたが、意外に起伏が多く、きつくてサイクリングを楽しむということにはならなかった。しかも寒かったので、1時間ほどでホテルへ戻った。ホテル周辺には、飲食店などはまったくなかったのも、ホテルの食堂で食事をすることにし、この地の伝統の名物料理を食べようと思った。しかしメニューを開いてみると、一般的な食堂の定番中華ばかりで、特別な料理はなかった。



《 サイクリングロードにある蝸牛の道標 》

翌日、タクシーの運転手に、「慢城農家楽」という名前の食堂に案内してもらい、地元の伝統料理だという「紅焼老鵝」を食べることにしたが、値段が高いのとあまり美味しくなさそうだったので、注文しなかった。また慢城極溪鎮には、土産物屋もなく伝統手工芸品の類もまったくなかった。慢城極溪鎮の案内地図には、寺院や芸術劇場、太平天国の戦跡などが書き込んであったので、タクシーの運転手に案内してもらった。しかし寺院は新しく小さなものだったし、芸術劇場なるものは粗末な野外劇場で、しかもそこでは1年に1回の公演が行われる程度だという。南京の近くだから、せめて太平天国の戦跡はきちんと遺っているだろうと思い、心を躍らせて現地に行ったが、現在、整備中ということで、それを見ることはできなかった。

地元政府の関係者は、これらの実情について、「つい最近まで、極溪鎮は道路も工場もなく、貧しく、都会の繁栄から、完全に取り残された村であり、“この村だけにはお嫁さんに行くな”と言われていた。それが幸いして、現在は“国際スローシティ”に認定された。実際には、村内に銅の加工工場が1か所あったが、それは村外に移転させた。これからは“国際慢城”として、売り出して行く。今年の国慶節の連休中には、1日に1万人の観光客が訪れた」と、強気で話している。残念ながらここにあるのは、「スローシティ」の思想ではなくて、ビジネスで言うところの「逆張り経営」思想である。

また中国人識者は、「過去において“スロー”という言葉は、中国の政治家にとってタブーのようなもので、彼らはもっぱらGDP成長に躍起になっていた。ところが中国は現在、世界経済が低迷しているのを背景に、経済構造調整と経済成長維持のバランスを取る道を模索しており、もしかするとこの先、極溪鎮は持続した発展を遂げるモデルケースになるかもしれない」と語っている。しかし私には、極溪鎮を取り巻く状況は、やはり拝金主義に毒されたもので、看板に蝸牛を付け、「スロー」を連呼しているだけで、他所と違う方法で「経済成長路線」を追い求めているように見える。そこからは「スローシティ」の思想のにおいはまったく嗅ぎ取れなかった。

2. 日本版スローシティ

日本の「スローシティ」運動の音頭を取っている久繁哲之助氏は、その著書「日本版スローシティ」(学陽書房刊)で、以下のように書き、その地域のライフスタイルの重要性を説いている。

「可視、論理、効率」から創られる均質化した都市を「ファストシティ」と定義する。ファストシティは学者が大資本と連携して考案、大資本が経済的利益を享受してきた。しかし、それは地域固有の風土・人間性を衰退、喪失させ、その弊害は小さな都市ほど大きい。欧米では、その反省から、ゆとりと豊かな感性を有する市民が地域固有の文化、風土を回復・創造する「スローシティ」への変換が進んでいる。現在では、小さな都市におけるまちづくりの潮流となっている。欧米のスローシティ成功は、地域に根づいた文化・風土とその地域に集まる市民のライフスタイルを尊重する精神が根底にあることが大きい。こういう根底にある不可視な精神こそ、現代日本のまちづくりにもっとも求められよう。

その上で久繁氏は、「スローシティ」の要件として、①ヒューマニズム:人間中心の公共空間をゆっくり歩ける、②スローフード:地域固有の食をゆっくり味わえる、③関与:地域固有の文化・物語に市民が関与(参加)できる、④交流:ゆっくり話せる・観れる・癒される、⑤持続性:市民のライフスタイル・意向を把握する、の5点をあげている。このような視点で、中国版スローシティの極溪鎮を眺めたとき、やはりそこに真のスローシティの姿を見出すことはできない。もっとも日本にも、その代表的成功都市は少ない。

さらに久繁氏は、現代は都市をめぐって5つの社会変化が起きているといい、①車社会、②インターネット社会、③グローバル社会、④格差社会、⑤カップル減少社会をあげている。①から④の久繁氏の指摘はよく目するものだが、⑤のカップル減少社会という視点はおもしろい。ここで久繁氏は、日本の非婚率の上昇は、「女性が男性へ高い期待」をもつことにあると推測し、特に男性に期待する収入が、男性が現実にて得ている収入より非常に高いことが根本にあり、男性の多くは、収入面で女性の高い期待に応えられないため、「金銭的に余裕がない」と結婚を諦め、「自分の欲望を満たす趣味に走る」結果、シングル文化の国が誕生しているのであると説明している。このような現象は、現代中国においてはもっと顕著であり、「マンションを持たない男性は結婚できない」というのが、常識化している。

私はこれらの都市変化に加えて、今後は高齢化社会の要素を付け加えるべきであると考え。中国より一足早く高齢化社会に突入した日本は、この問題をライフスタイルの思想にまで昇華させ、スローシティ思想として結実させていかねばならない。古来、日本には、伝統文化としての「姥捨て思想」がある。この思想は、自己犠牲の精神の極致である。われわれ高齢者は、飽食の時代を生き、医学の発展に裏打ちされた人類史上かつてない長寿社会に到達した。今こそ、われわれ高齢者は新たな思想を打ち立て、実践せねばならない。

以上